

資 料

女子青年の性役割意識の構造

伊 藤 裕 子*

性役割の次元についての検討はこれまでにいくつかの研究が行われ、その1つに柏木(1972)がある。柏木は中学生から大学生までの青年男女を対象に、性役割期待の認知構造を明らかにし、男性役割次元として活動性と知性の2因子が、女性役割次元として美・従順の因子が存在することを確かめている。また、多田(1974)は、男性性の尺度では活動性＝自我拡大性が主要な因子として存在し、女性性の尺度では自我の弱さ、および母性＝情緒の豊かさが主軸をなすことを明らかにした。さらに伊藤(1978a)は、これまでに取り上げられなかった次元として、Masculinity, Femininityの他に Humanity なるものが存在し、これを性役割次元に参入させることにより、より広範な記述が可能になるという。

以上はいずれも“性質としての性役割”を男性あるいは女性にとっての望ましさに沿って評定させ、その項目間相関から因子を抽出したものである。なお、“行為としての性役割”を評定させたものには稲垣(1969)、伊藤・堀(1974)などがあり、そこでは自己指向―他者指向という次元に性役割が位置づけられている。以上の研究は、いずれも青年期以降の人々を対象に性役割の認知的側面を扱ったものといえよう。

ところで性役割を問題にする場合、そこには性役割の様々な側面へのアプローチが存在する。幼児・児童では適切性役割選択、性役割同一視、性役割行動の習得が主に扱われ、青年期では先の認知的側面が主題とされる場合が多い。だが、このようなある側面からのアプローチだけでは、特に青年期以降におけるその個人の全体像、少なくとも性ないしは性役割に関する全体的な意識構造を捉えるには十分とはいえない。これまでに解析上の制約があったとはいえ、モザイク様の結果を寄せ集めて論議することには十分慎重であらねばならない。

青年期も後期になるとそれまでに形成された性役割観に基づいて将来にわたる具体的な性役割行動を選択・決定するようになる。また他方で、“生得的地位としての性”とそれに附帯する役割への評価も明確なものになっ

てくる。これら様々な性役割意識は青年の中でどのような形で統合されているのだろうか。

本研究では女子青年の性役割意識を扱うに際し、特に、性役割行動の基底にあたるといわれる(間宮, 1979)興味・態度の型としての性度、性役割観、これらに基づいて行われる性役割行動の選択(職経歴選択)そして自己の性に対する評価(性の受容)の4変数を取り上げた。ここで取り上げた4変数の個々の項目の関連についてはすでに他の場所で明らかにしたが(伊藤, 1980b)、本研究では特にそれらの変数をつらぬく性役割意識の基本次元を林の数量化理論Ⅲ類を用いて抽出することにより女子青年の性役割意識の構造を明らかにしようとするものである。

方 法

調査の対象と実施 対象は四年制の国立共学および私立別学大学に在籍する2・3年の女子136名で、調査は1977年12月に実施した。

調査内容と項目の類型化 調査内容は、1)性役割観、2)大学卒業後の希望する職経歴、3)性の受容、4)性度の4項目である。以下、その内容と数量化理論Ⅲ類の分析に必要な定量的変数のカテゴリー化の基準を記す。

1) 性役割観の測定には MHF scale(伊藤, 1978a)を用いた。これは30の性役割に関する形容語から成り、評定はその性質がどの程度自分にとって重要かを重要なものから順に6項目ずつ選択させる強制選択法による(5段階評定)。得点は M scale, H scale, F scale ごとに算出され、この中で個人が相対的にどの役割に重きを置くかによって個人を類型化した*。方法的には“各 scale

* 評定は強制選択法によるので3 scale の個人合計得点は90で一定。各 scale の得点可能範囲は14～46である。各 scale の平均値と S. D. は下記の通り(伊藤, 1978b)。

	Masculinity	Humanity	Femininity
平均値	32.02	39.35	18.63
S. D.	4.02	3.20	3.64

* PL学園女子短期大学

の平均値+1 σ 」以上に該当する者をそれぞれM型, H型, F型とし, それ以外の者を中間型とした。

2) 大学卒業後の希望する職経歴は TABLE 1 に示す 6 型にまとめられた。

3) 性の受容は, 女性性の受容「女性に生まれてよかったと思うか」と, 生まれ変わり「生まれ変わるとしたら男女どちらがよいか」の解答の組み合わせから成る。原理的には 4 類型だが「拒否・女」は 1 名のみなのでこれを「拒否・男」に繰り入れ, 「受容・女」「受容・男」「拒否・男」の 3 型とした。

4) 性度の測定には MMPI の Mf scale を用いた。60 項目の粗点を T 得点に換算し, これに基づいて調査対象を三分した。すなわち, “Mf scale の平均値 $\pm 0.5\sigma$ ”を基準に, feminine(~ 40), middle(41 $\sim$ 50), masculine(51 $\sim$) の 3 型とした。本調査の平均値は 45.33, S. D. は 9.38 で, レンジは 22 $\sim$ 75 であった (伊藤, 1980b)。なお, この測度は高点のほど基本的興味の型が異性の方向に偏っているというものである。

結果と考察

1. 性役割意識の基本次元

以上の手続を経て類型化された 4 要因計 16 カテゴリーを変数として, 女子青年の性役割意識の構造を明らかにすべく数量化Ⅲ類による検討を試みた。計算は一応第 5 根まで算出したが, 固有値が高く, しかも軸の解釈に際し十分意味のある解釈が可能な第 2 根までを分析に用いた。第 1 根の固有値は $\rho^2=0.3774$ ($\rho=0.6143$), 第 2 根は $\rho^2=0.3365$ ($\rho=0.5801$) で, 根の説明力の程度を表わすこれらの指標は, 同法を用いた他の調査結果と比べてもかなり高い値を示しており, 分析の効果はよいといえよう。

TABLE 1 に第 1 根と第 2 根のカテゴリー・ウェイトと

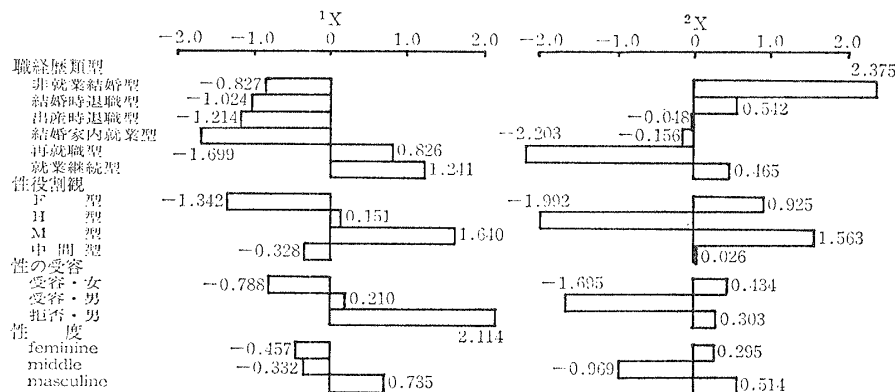


FIG. 1 第1根 <男性的—女性的価値> の次元

FIG. 2 第2根 <両価的因子内在> の次元

TABLE 1 数量化Ⅲ類による分析結果

アイテム カテゴリー名	反応サ ンプル 数	第1根 ($\rho^2=0.3774$) (レンジ) カテゴリー・ ウェイト	第2根 ($\rho^2=0.3365$) (レンジ) カテゴリー・ ウェイト
性役割観		(2.9817)	(3.5550)
M 型	27	1.6398	1.5630
H 型	33	0.1512	-1.9920
F 型	24	-1.3419	0.9250
中間型	52	-0.3282	0.0256
職経歴類型		(2.9399)	(4.5785)
非就業結婚型	9	-0.8272	2.3754
結婚時退職型	19	-1.0243	0.5422
出産時退職型	11	-1.2143	-0.0482
結婚家内就業型	24	-1.6991	-0.1563
再就職型	23	0.8259	-2.2031
就業継続型	50	1.2408	0.4652
性の受容		(2.9023)	(2.1287)
受容・女	82	-0.7884	0.4340
受容・男	26	0.2098	-1.6947
拒否・男	28	2.1139	0.3025
性度		(1.1917)	(1.4837)
feminine	48	-0.4571	0.2945
middle	40	-0.3324	-0.9694
masculine	48	0.7346	0.5138

レンジを示した。ここで, レンジの大きいアイテムほどその次元における説明力は大であり, 性役割意識構造の記述にとって効率のよいアイテムといえる。レンジの大きさでみると, 第 1 根では性役割観, 職経歴類型, 性の受容が同程度に効いており, 第 2 根では職経歴類型が最も大きく, 性役割観, 性の受容がこれにつぎ, 性度は第 1 根, 第 2 根ともあまり大きくはない。

次にこの結果を, 得られた軸ごとに個々のカテゴリー・ウェイトの方向と大きさについてみてみよう。FIG. 1 は第 1 根に, FIG. 2 は第 2 根に対応した軸の次元を表わしたものである。

FIG. 1 のプラスの方向をみると, 性の受容では拒否・男が, 性役割観では M 型が, 職経歴では就業継続, 再就職など職業指向の比較的強い型が大きな値を示し, 性度では masculine がこれに対応している。一方マイナスの方向をみると, M 型に対して F 型が, 拒否・男に対して受容・女が大きな値を示し, 職経歴で

は結婚家内就業, 結婚・出産退職, 非就業など家庭指向の比較的強い型が大きな値を示している。また値は小さいながらも feminine がこれに対応している。

この結果から, 第1軸は, 拒否・男, M型対受容・女, F型に象徴されるような〈男性的—女性的価値〉の次元, あるいは伝統的性役割からみると〈職業指向—家庭指向〉の次元と解釈できよう。

次に FIG. 2 をみると, 職経歴を除くどの要因も中間的反応が大きくマイナス側に位置するパターンをとっている。すなわち, 性役割観では F 型, M 型対 H 型, 性の受容では受容・女, 拒否・男対その中間型である受容・男, 性度では feminine, masculine 対 middle など中間的, 非性的なものがマイナス側に大きく値をとっている。一方, 職経歴でみるとマイナス側に再就職型, プラス側に非就業型が大きな値を示している。ところが就業継続型もプラスの値を示していることからわかるように, この軸は「仕事か家庭」という第1軸の二者択一をプラスの側に, 「仕事も家庭も」自己の生き方にふさわしい方法で遂行しようとする型をマイナスの側にはじき出していると考えられる。

このように第2軸は, F, M 型対 H 型, feminine, masculine 対 middle に象徴されるようないわば性的なものと非性的なものとを弁別する次元(〈性的—非性的価値〉の次元), あるいは受容・男, 中断再就職にみられるような二面的価値を同時に追求する因子を内在させる次元(〈両面的因子内在〉の次元)ということができよう。

2. 基本次元間の関連と性役割意識の3つの型

これまでの結果から, 女子青年の性役割意識の構造における基本次元には, 位相の異なる変数間の関連にもかかわらず従来から指摘されているような〈男性的—女性的価値〉の次元と, これとは様相を異にする〈両面的因子内在〉の次元とが抽出された。それではこの基本次元間の関連はどのようになっているのだろうか。

これを明らかにするために, 第1根を横軸に, 第2根を縦軸にとり, 各カテゴリーのウェイトに基づいてプロットしたのが FIG. 3 である。これを見るときれいな U 字型あるいは V 字型を示しているのがわかる。すべてのアイテムが完全尺度をなすとき, 第2根の第1根への回帰は U 字型を示すというが(鮎戸, 1966), 性度を除く他のアイテム群が尺度をなしていないにもかかわらず, これが部分的に見出されている。

次に, 反応カテゴリーのパターンから類型を導き出してみよう。これまではもっぱら性役割意識の基本構造を明らかにすることに傾注してきたが, 数量化理論Ⅲ類は, 同時に個人のパターン化も可能にする。FIG. 3 にプロッ

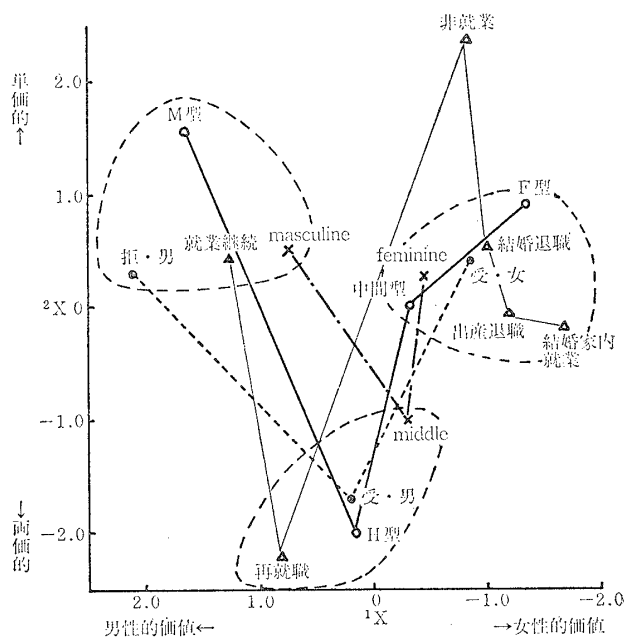


FIG. 3 性役割意識の構造

トした比較的距離の近いカテゴリー同士は, 同じ人とともに選択される可能性の多い回答である。これをみるとおおむね3つのタイプに分けることができる。各型の特徴は以下のように記述できる。

男性的価値指向型 この型は, 性役割観では M 型に属し, 職経歴は就業継続を希望している。そして女性に生まれたことはよくなかったと思ひ, 生まれ変わるなら男性にと考えている。性度でも女性的傾向は薄い。以上の特徴から考えて, この型を男性的価値指向の型ということができよう。池田・安富(1979)の女性性の受容と生まれ変わりの理由をみると, 「拒否・男」では, 女性であるが故の自己実現の困難性, 社会的拘束性に触れ, それゆえ男性に生まれ変わることによって自己実現を果たしたいというように, この型の男性的価値指向を別の面から知ることができる。

女性的価値指向型 この型は, 性役割観では F 型に属し, 職経歴は結婚・出産退職, あるいは結婚家内就業を希望するなど家庭生活に重点を置いた選択を行っている。そして女性に生まれてよかったと感じており, 生まれ変わっても女性がよいと考えている。女性度も高い。このような特徴から考えて, この型を女性的価値指向の型と呼んでよいだろう。先の池田らの「受容・女」の理由をみると, 妻・母としての女性役割を積極的に評価する一方, 男性役割の社会的責任の重さを強調するなどこの型の特徴を記述的に裏付けている。

個人内価値指向型 この型は, 性役割観では H 型に属す。職経歴では仕事か家庭かという二者択一ではなく,

出産・育児で一時仕事を中断しても、基本的には自己の信条を貫くべく再就職を希望する。それゆえ、女性であることを十分受容した上で、生まれ変わるなら男性にと考えている。性度では両型の間中に位置している。このようにこの型の職業と家庭に対する意識の柔軟性、男性一女性に囚われない価値態度から、この型を個人内価値指向の型と呼ぶことにする。池田らは、「受容・男」では両性のそれぞれプラスに評価できる側面が強く意識されていると述べているが、その意味からもこの型の両価的側面を伺うことができる。

さて、Fig.3にもう一度目を向けると、この3型のパターンはMHF scaleの基本次元（三角形仮説、伊藤、1978a）と同じパターンを示していることがわかる。伊藤（1978a）は既婚男女約800名を対象にMHF scaleを用いてM型、H型、F型を類型化し、これを外的基準として判別分析により他の様々な要因から各型の特徴を抽出している。それによるとM型は社会的価値指向が強く、これに対してF型では対人的価値指向が強いという。ところがH型では、外的価値基準に囚われず、その個性に合った生き方を望むという個人内価値指向が強く表われていた。この特徴はそのまま本研究の3型にあてはまるといえないだろうか。対象者の年齢も、調査内容・解析方法も全く異なるこの2つの結果から、期せずして同じ基本次元、同じような特徴を備えた3型が抽出されたことはその存在の普遍性を物語る証左の一部といえよう。このことをさらに強固なものにするためには、今後また別の側面からの重層的な検討が必要と思われる。

なお、本研究における女子青年の性役割意識に及ぼす父母の養育態度については稿を改めたので合わせて参照されたい（伊藤、1980c）。

要 約

本研究は女子青年の性役割意識を多次元的に捉え、その構造を明らかにすることが目的であった。取り上げた指標は、性度、性役割観、職経歴選択、性の受容の4変数で、136名の女子学生を被調査者として数量化理論Ⅲ類による検討を試みた。結果は以下の3点にまとめられる。

1. 得られた軸は第2根までで、第1軸は〈男性的—女性的価値〉の次元、第2軸は〈両価的因子内在〉の次

元であった。

2. 第2根の第1根への回帰はきれいなU字型を示し、尺度構成上有益な示唆を得た。

3. 反応カテゴリーのパターンから3類型が導き出され、それらは男性的価値指向型、女性的価値指向型、個人内価値指向型であった。

本研究で得られた基本次元および3類型は、別の側面から検討された既婚男女の結果と基本的に通じるものであり、その存在の普遍性の一部を裏付けていた。

引 用 文 献

- 鮎戸弘 1966 政治的態度の構造に関する研究Ⅰ 心研, 37, 204-218.
- 池田政子・安富利光 1979 女子学生の人生計画と「女性であること」に対する評価との関係 山梨県立女子短期大学紀要, 12, 85-97.
- 稲垣知子 1969 青年期における女性の役割観の変容について 京都大学教育学部紀要, 15, 128-141.
- 伊藤裕子・堀洋道 1974 戦後における女性の役割観の変容 日本社会心理学会第15回大会発表論文集, 21-24.
- 伊藤裕子 1978a 性役割の評価に関する研究 教心研, 26, 1-11.
- 伊藤裕子 1978b 女子青年の職経歴選択と父母の養育態度 日本教育心理学会第20回大会発表論文集, 150-151.
- 伊藤裕子 1980a 女子青年の性役割観と父母の養育態度Ⅰ 教心研, 28, 67-71.
- 伊藤裕子 1980b 女子青年における女性性の受容と性役割 日本教育心理学会第22回大会発表論文集, 508-509.
- 伊藤裕子 1980c 女子青年の性役割意識と父母の養育態度Ⅱ PL学園女子短期大学紀要, 7.
- 柏木恵子 1972 青年期における性役割の認知Ⅱ 教心研, 20, 48-58.
- 間宮武 1979 性差心理学 金子書房
- 松中兼松 1974 性度心理学 帝国地方行政学会
- 多田健治 1974 パーソナリティにおける男女性の次元の検討 金沢大学教育学部紀要, 23, 205-218.

(1980年6月30日受稿)